

武田哲学の芯に迫るためのインタビュー = 質問 内田卓志

—内田卓志さんと白樺教育館館長・武田康弘の哲学対話—

以下は、2015年4月29日から2016年3月8日まで、ブログ「思索の日記」上に掲載された、内田卓志さんと白樺教育館館長・武田康弘の哲学対話をまとめたものです。
なお、対話は現在も進行中です。

2016年7月3日 ver.0.9

内田卓志さんは、早稲田大学で哲学を専攻し、プラグマティズムを中心に研究し、「京都フォーラム」での発題者の一人でした。石橋湛山の研究者でもあります。また、一哲学徒であると同時に、会社員という一生活者としての土台を根に持つ方でもあります。

1. 武田哲学の芯に迫るためのインタビュー = 質問
2. 実存とは何か？
3. 差異と対立の違いは？ 否定ではなく、対立を。
4. ほんとうの教育とは？
5. 意味論抜き的事实学(パターン知)の累積は、死に至る病
付録：強く安部首相を支持する若者（女性）とのネット対話
—「教育の本質論」について。
6. 宗教についての対話
7. 宗教についての対話 2
「超越性」という発想はすでに無効。
「宗教表象」による現実への応答は限界に。
8. プラトンのイデア論、
「ほんらいのフィロソフィは、書物の読解ではない。」
9. つまらない顔はイヤ、からはじまったわたしの哲学
10. 「学問的」ということと「自分で考える」ということ
11. フィロソフィの本質とは、
誰にも何にも遠慮せずに堂々と思考する営み
12. プラグマティスト／現象学 フィロソフィの方法と本質

1. 武田哲学の芯に迫るためのインタビュー = 質問

以下は、内田卓志さんからのメールです。

内田さんは、早稲田大学で哲学を専攻し、プラグマティズムを中心に研究し、「京都フォーラム」での発題者の一人でした。石橋湛山の研究者でもあります。



内田卓志さん
撮影：武田康弘

内田=>武田

武田哲学の芯に迫るためのインタビュー = 質問

もう武田先生と知り合って10年以上になります。先生と私の出会いは、わたしが2000年12月に沖縄旅行で偶然にも出来たばかりの『白樺文学館』の小冊子(先生制作の豪華パンフレット)を手にしたことによりますね。実は、それ以前の1990年に岩波の月刊誌『世界』に載った武田論文を読んでいて存じ上げていたのですが、その辺は、別途話すことにしまして・・・。

いつだったか、私の敬愛する哲学者の山脇直司先生は、武田哲学を称して、「エロースの哲学」と言っていましたね。武田先生に10年師事してきて、「そうなんだろうな」と思います。これから武田先生の哲学の芯についてせまりたいです。私がインタビューしますので、ご教示下さるようお願いいたします。いろいろ質問します。

私は、武田哲学の柱には、哲学(恋知・愛知)とは何か、哲学的思考は、どのように行われるべきか、との問題意識と共に、哲学を現実の生活(世界)に活かす方法、哲学を役立てることについての、具体的な思索が常にあると思っています。それは別に、プラトンでもなければ、カントやヘーゲルでもない、ましてはハイデガーの哲学でもないでしょう。

武田先生、それでは伺います。先生は、30年以上に渡り個人の<主観性>を強調されてきたと思います。そして、もう一つ大切な哲学的知としての<全体論>がありましたね。先生は、全体論について、以前たしか大工さんが家(建物)を建てるときの例?を使って説明されていましたね。これらのことから話題にしたいと思います。

まず、全体論について、全体論は、哲学的には存在論の考え方として、<原子論>(アトミズム)に対して<全体論>(ホーリズム)として提出されることがあります。<主観性>は、当然に<客観性>に対する言葉で、主観性を「個」と考えれば、客観性を「全体」と考えられるし、「個人」にたいしては、「社会」との対比で

論じることでもできると思います。(実存に対しては、構造とか・・・)

そこで質問です。私が思うには、先生の言われる<全体論>と<主観性>の関係です。普通に考えれば、全体論を強調するには、客観性を強調し、原子論を強調するには、主観性を強調するのが、すっきりと対応関係として考えられるのではないのでしょうか？よく学校の先生から言われました。「物事を全体的・客観的に考えろ・・・」と。

この関係性について、どう考えればよいのでしょうか？哲学の考え方は、一般的に考えられているもの、言葉として一般的に使われている使い方とは違うのでしょうか？よろしくお願いします。

武田=>内田

内田さん、よいご質問、とても感謝です。

早速ですが、まずはじめに、
フィロソフィ(恋知)の土台とは、人生の意味や価値、生き方を考える営みですから、個別の学問(諸科学)とは異なり、部分を問題にするのではなく、全体を問題にします。生き方の部分とか専門というのは、ありえない話ですから。

個別学問(諸科学)は、対象を狭く限定することで、細かな観察や実験を可能とし、いわゆる「客観性」を獲得できるわけです。もちろん、何をどのような認識するのかは、人間の欲望、関心や必要や目的という主観的な領域の問題です。

わたしは、木を詳しく観察することと、その木が生えている森全体を見ることはどちらも必要という考えですから、部分と全体の往復になります。

内田さんの言われるホーリズム(全体論と訳される)とは、現代哲学のクワインに端を発しますが、わたしは、それを主題化したのではなく、もっと広い意味(=日常言語の次元)で、部分と全体についてお話しています。

認識は、個別科学において客観性を目がけるという認識であれ、主観の欲望=関心・目的・必要により成立しますから、主観のありようを注視し自覚化することは、何より大切になるわけです。フィロソフィとは「主観性の知」です。

人間を惹きつける対象&惹きつける作用である「エロース」は、フィロソフィを成り立たせる動因であり、それなくしては、混沌と広がる世界を意味づける=秩序づけることはできませんので、エロースは、武田フィロソフィというより、古代アテネのソクラテス出自のフィロソフィそのものと言えます。

なお、「客観学」(知の手段)と「主観性の知」(知の目的)の日本における逆転については、参議院事務局から依頼された論文『キャリアシステムを支えている 歪んだ想念』に記しましたので、見てください。この知の逆立ちを自覚している人は、学者を含めてほとんどいませんが、ここに「日本人の根源的不幸」(外の価値に呪縛され内からの生がない)があります。

http://www.shirakaba.gr.jp/home/tayori/k_tayori108.htm

内田=>武田

全体論についての回答、ありがとうございました。続けて質問します。

先生の考えている全体論は、哲学の使命に関わる根源的な点だと思います。私の質問の前提とした全体論は、哲学の領域に関しての問いでした。

存在論・認識論・価値論のように……。先生の問題意識を承知したところで、さて個別科学は、論理的、実証的な系統立った説明が必要になります。

つまり科学性ということでしょう。その科学的な知のありようを客観性という人もいますね。

それでは、主観性の知の哲学は、ある種の科学性(皆が了解できる地平)を担保しなくて良いかとの疑問が湧きます。主観と主観の衝突ばかりでは、何が真なのか、何が善なのか、何が美なのかが分からなくなります。つまり好き勝手に利己的に考えることも主観性の知になってしまうのか、との疑問です。

そこを解決する考え方が、ギリシャ以来の、哲学の本質的な意味と考えてよいでしょうか。つまり哲学的な原理についての問題です。そのあたりについて、お話し頂けないでしょうか？

武田=>内田

「ほんらいの哲学＝恋知」の核心について

まず最初に、

諸科学の「客観的」認識と言われるものも、誰か個人の頭の中で得られるものですから、事実としては「主観」です。ただし、その認識内容が、その領域に携わる人々の共通理解になれば「客観的認識」と呼ばれることになるわけです。

というわけで、主観と客観とは並立して対立する概念ではないのですが、言葉が作りだすイメージが、「二項対立」を生み出します。要注意です。

では本題です。

フィロソフィ(直訳は「恋知」)は、主観の感情や想念ではなく、「主観性の知」―「知」なのです。主観＝私の直観や想いを絶対化するのとは対極にある営みです。

誰でも想いや直観から認識は始まるので、それは全く正当なのですが、そのはじめの直観を固定して絶対化するならば、自分勝手な思い込みに留まり、なんの普遍性もない「私的認識」に陥ります。

フィロソフィは、心身(五感)と頭(思考力)をフルに用いて「吟味」すること＝疑い、試し、確かめる作業です。その自問自答を他者に示し、問答し、だんだんと普遍性の豊かな考えに鍛えていく営みですので、その限りでは個別科学と変わりません。それは、

- (1) 宗教的信念のような絶対的「真理」ではなく、また、
- (2) みなが言うからという一般的「真理」でもなく、
- (3) 腑に落ちる・深い納得という 普遍的「真理」を目がけるものですので、諸科学をその一部(手段)として含むのです。

ただし、諸科学は、認識対象を狭く限定することで細かな観察や実験が可能となり、質的相違を量的(数字)相違として表すことで、客観的と呼ばれる認識を得る努力をしますが、第一回目のご質問でお応えした通り、フィロソフィーは全体的な見方や総合判断をしますので、頭の使い方が異なります。フィロソフィは、諸科学における客観知を手段とする主観性の知であり、これが知の目的です。

人間の生の意味や価値を直接に問題とするのではなくとも、例えば、どのような家を建てるか、どのような音楽ホールをつくるか、それを思案するのは主観性の知であり、安全性という基本的要件のみならず、用途を満たす程度や、美しさの程度や、使い勝手の程度などが問題になりますが、それは客観知として測れるものではなく、全体知としての主観性の知による総合評価となります。

また、優れたセンス、企画立案能力、創意工夫や臨機応変の才、自由対話の力、作文力、問題発見と解決の能力、想像力…………などは、みな主観性の知であり、それらは受験知―テスト知・客観知ではありません。繰り返しますが、人間の生きる意味や価値の問題を土台として持ち、含むこれらの主観性の知こそが知の目的であるわけです。そのことをわが日本人がほとんど自覚できていないのは、とても困った問題と言えます(東大病)。

わたしは、これに取り組んではや40年。時の経つのは早いもの、まだまだ頑張りますよ～～～～。全身がだいぶボロくなっていますが(笑)。

内田=>武田

なぜ主観性の知に無関心なのか

続けて伺います。なぜそのような、想像力(構想力)の源泉ともいえる主観性の知について無関心なののでしょうか。それとも誤解しているのでしょうか。

また、主観性を消去したほうが、誰かに都合がよいのでしょうか。かつては、お上、大日本帝国、今なら会社とか……。

私は武田先生とある高名な哲学者※との対話を隣で聴いたことが数回ありますが、このことを説得し理解してもらうのに、かなりの時間が掛かりましたね(その先生は、対話をはじめて二時間ほど経って、「武田哲学は、哲学の王道だ。」と言われていました)。

デカルト以来の機械論的自然観批判、近代批判が哲学会でも流行ですので、主観性についての誤解は学者の間にも蔓延しているのかもしれない。

私はデカルトやベーコンの機械論的自然観には与しません、近代の超克などは、たやすくできるものではないと思っています。後期ハイデガーは、ちょっと危険です。この話をすると長くなりそうなので、このあたりで武田先生にバトンタッチします。

※ 山脇直司先生:ミュンヘン大学で哲学博士号、東京大学教授—今は名誉教授。数年前に、武田先生と山脇先生との対話—論争が幾度も行われた。

武田⇒内田

「客観学」(手段)と「主観性の知」(目的)の混同と逆転のわけ

単に「学」の問題というのではなく、現代の人間の生き方・考え方の根源的大問題、それが、主観性の知こそが「知」の目的であり、読み書き計算にはじまる客観知(答えが決まっている知)は手段にすぎないことを知らない—その逆転に気付いていないことなのです。

この逆立ち、価値転倒は、世界的な問題ですが、とりわけ日本は酷いと言えます。その原因は、幼いころから「想う→考える」という【対話による子育て】(表情やボディランゲージの交感を含む)がなく、芸を仕込むようにして「読み書き」という技術を教え込むもうとする教育ならぬ強育が支配しているからでしょう。



武田康弘
2015年
撮影 西山祐天 さん

答えは決まっている＝正解があるという思い込みは、日本の型の文化に、正解として輸入された近代欧米学問が接ぎ木されたことで、酷い歪みとなって、手段も目的も分からないままに「知」に接するという事態を招いている、というわけです。これは、小学校から大学院まで変わらずです。教える側も教わる側もこの逆転の事態を自覚していません。この問題を明瞭に述べたのは、おそらく公式には、参議院のわたしの論文がはじめてでしょう。

キリスト教という唯一神への信仰がつくった「近代西ヨーロッパの学」は、ニュートンの力学・数学や宇宙論に至るまで神の偉大さを証明するためという宗教思想を背後に持ちますので、人間の主観を離れた「純粋な客観」(神がつくった完全な世界)があるという根深い(深層心理にまで入り込んでいる)思い込みから自由な人は、稀にしかいません。ここからの解放は、21世紀のいちばん重要な課題だとわたしは思っています。

キリスト教文化圏※は、さすがに本家本元だけにこの弊害に気づくのも早いようで、オランダや北欧にフランス、それにイギリスのエリート族などの間では少し前から「正解」のない問い、フィロソフィの教育をはじめています(幼少期より)。絶対的な真理を求めるのではなく、普遍的な思考を鍛える教育です。いまだにテスト知のチャンピオン崇拝＝東大信仰が揺るがない日本は、どんどん置いてけぼりですが、教育改革をするにも、政府関係者には、東大病の官僚と、アナクロニズムの国体思想のイカレタ学者しかいないのですからお手上げです。

※なお、フィロソフィは、西洋ではなく、小アジア(いまのトルコ)で起こったもので、かつ一神教の思想ではない(紀元後4世紀にキリスト教によりプラトンがつくったアカデメイアは廃校にされた)のですから、「西洋哲学」という言い方は、欧州人の我田引水でしかありません。インドの釈迦(仏教)の思想と近親性をもちます。要注意です。

なお、後期ハイデガーは、論外です。彼のように、詩的言語で語っても、それはフィロソフィにはなりません。詩作品として発表するなら分かりますが、それを哲学だと言うのでは、知的退廃というほかないでしょう。きちんと吟味、検討、批判のできない言葉の用い方は、論理ではありませんから。超論理(笑)。

内田⇒武田

主観性の知への無知 日本教育の病＝「東大病」

実例を多く示していただきありがとうございます。本来眼目であるはずの、主観性の知を育て、鍛えるべきことは二の次、三の次にしておいて、客観知を中心とす

る技術知、パターン知のみに優れた人間を創ろうとする逆立ちした教育が、いまだに日本では主流と言うわけですね。その象徴こそが、東京大学を頂点とするヒエラルキーにあり、この国の病(東大病)だというのが先生の長年のご主張でした。

私がスウェーデンの教育について、聴き読んだところによると先生の言われる通りで、全く日本の学校の勉強の仕方と違います。まだ江戸時代の寺子屋のほうがスウェーデンに近いです。(笑)私も大学で学んだ教育原理とやらを思い出し、敬愛するジョン・デューイの教育哲学を考えながら先生のお話伺いました。私は、25年以上ビジネスパーソンをしていますので、学校教育の現場はほとんど存じ上げません。そこでもう少し先生に現場を踏まえた教育のことを話して頂き、そこから哲学の使命について話をつないでいきたいところです。

続く

2. 実存とは何か？

内田⇒武田

武田先生

一休みしたところでインタビュー・質問の続きです。
主観性の知について、語っていただいています。今までは、その認識論的・存在論的な側面についてのお話でしたが、次にその実存論的な側面について伺います。

まず、実存という言葉について伺いたく思います。一般的には実存とは、古代ギリシャからある概念と言われていますが、20世紀の思想的・哲学的成果の一つと考えられています。実存主義とか、実存哲学とか言われます。サルトルやヤスパースは、自らの思想・哲学にその名を与えました。日本でも実存的不安という言葉が流行したのはいつ頃だったのでしょうか。評論家の山崎正和氏が、実存(主義)的分析を自らの評論、『不機嫌の時代』で見事に応用したことを思い出します。

それでは武田先生の考える実存について語っていただき、その後、教育と主観性の知における実存の問題、近代と実存の問題、そして、社会と個人の問題へ話を展開できればと思います。

武田⇒内田

内田さん

わたしは大学の哲学徒でもありましたから、実存(現実存在の略)の思想を哲学史の中におく見方も分かりますが、今は、それらはわたしの思索の肥料になってしまい、そのものとしては検討する必要を感じません。

以下に、わたしの実存の定義やそこから得られる帰結についてお話します。

わたしのいう「実存」とは、私は、一回限りの私の生を生きている、という自覚を意味します。ほかの誰でもない、ただ一人のこの「私」が生きる、という明晰な自覚をもった生を実存としての生と呼んでいます。実存の明晰な意識化は、必然に私の生の意味充実を目がけます。

私は世界の中に生きていますが、世界の意味を汲み取るのは、私の意識です。何をどのように見、考えようと、私は私の意識を超えてその外に出ることはできません。私は外なる存在をはっきりと意識できますが、それも「私」の意識であるというパラドクスから逃れられません。この認識論の原理は、実存として生きる以外に人間の生はないことを教えます。

したがって、私にとって意味のないことは認識の対象にはなりえません。他者が意味あるものとして遇する事象も、もし私がそう感じなければ私には存在しないも同然です。これは原事実です。人間の認識は関心がなければ成立しないので、関心が認識の出発点ですが、関心はこの一回限りの生をいきる「私」の関心ですから、実存としての生と重なっています。認識と実存が結び付いていることを知るとは、フィロソフィ(恋知)の原点なのです。

主観と結び付いてしか客観はなく、客観それ自体を問うことが理に反するのは、現代ではすでに「常識」になっていますが、主観とは、抽象的な人間の主観ではなく、最後は必ずこの「私」の主観でなければなりません。それを離れば主観は根付く場所を失い、ただの言葉＝概念に陥ります。もしそうなれば、言葉や数字を概念としてだけ扱う精神疾患患者(アスペルガーの一種)の意識と同じになってしまいます。生々しい実感・ピントの定まったクリアーな意識を伴わない主観とは生きた主観ではなく、ただの言葉＝概念です。要注意。

人間の主観としての意識が、この世界を世界として定立させ、世界に意味を与えているので、各自の人間存在は、物の存在とは存在のありようが逆です。物はそれ自体で存在しますが、人間とは意識存在で、物やさまざまな事象を意味づけ価値づける主体者です。意識のない人間とは人間ではありません。ここで注意すべきは、前意識や無意識の存在ですが、意識されない意識としての無意識領域も、それが意識＝自覚にもたらされた時にだけ現実的な意味をもつことです。検討・吟味(＝意識化)されなければ意味をもちませんので、無意識領域を実体化させて物の存在のように見えてはダメです。

というわけで、どこまでも「私」が見、感じ、想い、考え、生きるという根源的な事実

から目を離さないこと、それを明晰に自覚することが「実存」という意識です。繰り返しますが、実存の明晰な意識化は、必然に私の生の意味充実を目がけます。

この人間の生の原理が自覚された時にはじめて各自の私は協力や共同が可能となり、各自の実存は、響存(響き合う存在)ともなります。各自の「対立」は、対立があるからこそ豊かな成果をあげます。対立は否定ではありません。必要不可欠な人間の生の要素です。自己であれ他者であれ、否定したら元も子もなくなります。大事なのは「対立」で、それゆえに各自の実存は輝くのです。この話は、すでに教育論に移行していますね。では、また。

3. 差異と対立の違いは？ 否定ではなく、対立を。

内田⇒武田

武田先生の実存の思想、たいへん魅力的です。長年の先生の思索の跡が分かります。繰り返し読みましたが、先生の考えられている「実存」と私の思っている「実存」には隔たりがないことを確認できました。

実存とは、「自覚存在」であり、その自覚とは生の原理(ただ一人の私が生きるという明晰な確信を持って生きること、生の意味充実をめざし生きること)を自覚するということ。その自覚を通して生活すること、生きることからはじめて私と他の私(他者)との協力・協働(共働)が可能となるのですね。

私見ですが、ここで注意したのは、協力、協働(共働)が先立つわけではないことだと思います。(このテーマは、後で個人と社会のテーマで伺う予定です。)そこで、先生は、以前、各自の「対立」(実存と実存の対立)は、ただの「差異」ではないと言われていました。そのあたりからはじめて、その後で先生の教育論を語って頂きたいをお願いします。

武田⇒内田

内田さん、いつもありがとう。

わたしの実存思想はラディカルであると評されることがありますが、内田さんも賛同されたように、特定の主義によらずにちゃんと考えれば誰でも納得できると思います。実存思想のみならず公共思想においても出発点は「私」です。それ以外

にはありえません。「私」からの出発の自覚、「私」の深い納得（腑に落ちる）を目がけること、これはフィロソフィの原理中の原理です。

では、次に「差異」（差別という価値意識をともなう違いではなく、色の違いのように上下関係にはない違いの意味）と「対立」の相違についてのご質問にお応えします。

互いの違い＝「差異」を認めよう！ 尊重しよう！とはよく言われますが、「対立」を尊重しよう！とはなかなか言われませんか（笑）。

違いは違いでよいわけですが、違いは、ぶつかりになることもあります。そのぶつかりを避けようとして「互いの尊重」という言葉＝思想が持ちだされることがありますが、それではただバラバラに個々があるだけで、生産性がありません。何も生まれず、心の内からの喜びも出てきません。互いの発展＝内的世界の豊穡がありません。ひ弱な「私」になってしまいます。

違い（差異）をほんとうに尊重するならば、「対立」が出るはずで、違うから避ける、とか、更には無視するというのではヒドイこと。わたしは、こう感じ、こう考えるけれど、あなたはどう思う？ と言えば、「なるほどね」、という場合もありますが、「それはおかしいこと」、という場合も生じます。

ぶつかりを避ければ、必ず、形式上の上位者が「勝ち」ます。ぶつかれば、内容の検証になりますが、ぶつからなければ、形式上の上位者に従うほかなくなります。現代ではぶつからずに上手に！ という哲学もどきの处世術が哲学を名のり、そういう類の書物ばかりが売れますが、これは、フィロソフィの自殺行為です。見事な（笑）詐術です。詐術としての哲学＝上位者に従うことを正当化する哲学とは、ブラックジョークの極！

対立しなければ、ほんとうに優れた考えが生まれ出ることはありません。進歩もありません。対立はとても大事で、必要なものです。ただし、対立は「否定」ではありません。もちろん影口とは正反対のもの。否定する・相手を潰そうというのではなく、対等な存在同士として「対立」することが大切です。権力を持った人が、その権力により、丸腰の他者と対立することは、対立ではなく、否定になります。それは酷い悪行です。互いの対等性と自由を認め合う者同士が「対立」することがとても大切で、それはよく生きるために必須の営みです。

だから、会社でも、会議の場面においては無礼講が必要で、社長など上位者への批判がよろこばれる一歓迎されるようにすることが大切です。ずいぶん昔ですが（25年ほど前）わたしのこの思想を実践した日本オラクル（株）は、驚異的な成功をしました。株式上場は1999年2月（会社創立は1989年）ですが、1987年1月からわたしの哲学の生徒＋友人であった佐野力さん（初代社長・会長）は、武田フィロソフィを会社で実践したのです。成長どころではなく爆



佐野力さん58歳
1999年6月 日本オラクルで

発！しましたよ。

教育一般については、この後で。

否定ではなく対立。これがキーワード。

4. ほんとうの教育とは？

内田=>武田

それでは、また続きを伺います。

「対立」とは？よくわかりました。先生の実存概念は、決して過激なものではなく、徹底的・根源的な、まさにラディカルです。私にはよくわかります。

かつて私は、ヤスパースの実存哲学を学びました。ヤスパースの実存哲学に、「実存的交わり」という概念があります。交わりとは、英語のコミュニケーション:communication(ドイツ語だとコミュニケーション:Kommunikation)をさします。その実存と実存の交わり

は、「愛しながらの闘い」だともいうのです。私は、ここでヤスパース哲学の解説をしたいのではなく、ヤスパースのいっていたことが、先生がいわれている「対立」という行為を通して、私の記憶の底から立ちあがってきたのです。



内田卓志さん
2015年49歳上野で
撮影：武田康弘

それでは、そろそろ教育の問題に移らせて頂きます。先生は、40年ぐらい私塾を通じ教育の現場に携わって来ておられますね。先生の教育の理念を伺いたいところですが、話を具体的にさせた方がよいと思います。そこで、今の学校教育と白樺教育館の教育の違いからお話し頂きたいと思います。その方が、具体的な教育の現場の経験から、教育における主観性の知の意味について一層理解できるように思います。如何でしょうか？

武田=>内田

わたしのフィロソフィと実践を踏まえた教育論は、いろいろな雑誌や本またblogにずいぶん書いてきましたので、まとめると一冊の本になりますが、核心をいくつか。

まず、何よりも機械的な学習は最悪です、『公文式』はその最たるもの。反復して覚える九々にしても、意味(かけるというイメージ)を頭に浮かべての反復が絶対であり、単なる数字－記号としての丸覚え＝機械的反復は、ナンセンスの極みです。

もうずいぶん昔にアメリカの教育省は、**公教育に『公文式』を使うことを禁止**しましたが(教育省の追跡調査で、公文式を採用した学校の卒業生は創造性に欠けるという結果が出たので、とNHKの番組が詳細に伝えていました)、わたしの教室でも『公文式』をやっていた子は、**機械的に算数をするために、文章題の意味を捉えることがひどく苦手**です。はじめから『ソクラテス教室』で、生活経験やその子の興味と重ねて「**意味が分かる算数**」を勉強した子とは、頭の構造が根本的に違ってしまう。

算数に限らず、知的教育は、丸暗記とパターン認識(それはコンピュータの方法)ではなく、自分の頭で意味を捉える力の育成です。**学習において【意味】を了解し、つかまえる方法を身に付けなければ、一人の人間としての精神的自立は得られません**。これは、知＝頭脳の原理です。意味論なき事実学の累積は、**事実人(犬でも猫でもなく人という種ではあるが人間的な意味をもった「私」を生きられない)しかつくりません**。学業成績(テスト知)が極めてよい子の多くが、**他者(権威者や権力者)に操作操縦される優秀な！？「事実人」に陥っているのが現実**です。実に恐ろしいことです。

音読でも、スラスラとアナウンサーのように読めることを目標するのはバカげた話です。**文脈にそって意味を捕まえながら、また、情景を思い浮かべながら読むこと**、論理的な意味把握と、感情移入が何よりも大切です。つかえたり、かんだりしてよいのです。スラスラを心掛けるのは、頭を悪くすることなのです。

また、**理科**は、伝えたいことの核心の意味が示されずに、凹凸のない知識が羅列され、それを覚えるだけなので、子どもが興味の持ちようがなく、教科書や副教材を見ているわたしも苛立つことが多いですが、学校の教師もこれでは苦勞するでしょう。さらに、直接経験が少ないことも大問題です。「白樺教育館」の屋上に設置している望遠鏡(口径21センチ反射赤道儀)で月面や惑星面を見た感動は驚きの声で分かりますが、いま、直接に、という経験抜きに机上の学習をするのでは、知は干からびたものにしかありません。また、海に潜る経験、毎年の式根島でのキャンプ&ダイビング(今年で40回目)は、「**得難い経験をさせてもらい、先生にほんとうに感謝しています**。」とOBや父母のみなさんから口を揃えて言われます。

社会科は、有名人の暗記で、生きた人間の営み＝自分たちの今の生とは無関係です。出てくるのは○△天皇という名前が中心で、明治政府がつくった「**天皇史観＝偉人史観**」のまま。庶民は付けたしの存在扱いです(笑・憤)。

近代史は、例えば、伊藤博文は初代総理で明治憲法をつくった偉人とされますが、英国公使館に放火し全焼させたこと、暗殺者であったこと、大金を横領したことなどは一切触れられませんので、**偏ったイデオロギー教育**になり、真実がもつ面白さ、多面的な世界の不思議はすべて消されています。平面羅列で知が立体化しないのです。意味の分からない丸暗記ばかり。いつまで続く～～～。

わたしの教室で**歴史**に興味を持ち、成績もよい子は、マンガ『日本の歴史』世

界の歴史』(白樺教育館の蔵書)の愛読者だった子です。ついでに、現代史＝戦前の日本を学ぶのに最適なのは『はだしのゲン』(蔵書)です。著者の体験談は、建前のウソではなく、ホンネと真実のもつ迫力が実に面白いのです。公民はその最たるもの。

お題目、表層的、建前、ごまかし、騙(だま)し、では、人間としての自信とよこびをもつ子、ほんとうに優れた子が育つはずがありません。せいぜい偽善者が育つだけ。

次に人間教育です。

政府が行う道德教育と呼ばれるものは最悪です。フィロソフィ(恋知)の実践教育こそが必要なのです。政府文部科学省が介入する「道德」とは、背後に特定の思想を必ず隠し持っていますので、本質的に占脳＝染脳教育以外にはなりません。これは、特定の政治勢力(自民党の文教族)が行う教育では決して避けられないことで、反教育＝ダメ教育の見本です。

人間を育てるところか、人間の可能性を狭めて型にはめるだけのことです。「道德教育」とは非・人間教育でしかありません。自分の経験を踏まえて、種々の情報を吟味し、自分の頭で考えたことを自由に交換・交感するフィロソフィの実践教育こそ、大きく深い【民主的倫理】をもった子＝人間を育てるのです。

アメリカのマシュー・リップマンとその同伴者たちが全米の公教育で実践してきた「6歳からのソクラテス教室」や、フランスの公立幼稚園で行われている「幼児の哲学教室」などは、極めて示唆に富む実践ですが、わたしの「ソクラテス教室」では、そうした思想－精神で、もう40年間も試行錯誤を続けてきました。「孤立」ですが、栄光でもありますね。

世界の最先端！！(笑)

最後に一番大切な幼児(1歳から2歳くらいの最重要期間とそれ以後)ですが、とにかく、大人の常識に縛られずに(大人が自分のもつ常識を白紙に戻して大元から問い直す営みが一番大切)、【こどもを無条件で愛する】ことが絶対条件なのは言うまでもないことです。その基盤があれば、こどもは深く自己肯定ができますので、どのような困難にも負けず、打ち勝ち、自分自身の人生を歩むことが可能になります。



「わたしの道をまっすぐに！」
二歳の孫

また、イタズラ、悪さ、おどけ、ふざけ、は何より大切で、「小利口」や「小さい大人」のような子どもにするのは、言語に絶するほどの「悪」です。

以下は、10年以上前に出したものですが、再録します。

お母様、お父様、教育とか躰(しつけ)と思って子どもの心を抑圧し、歪めてはいませんか。

発育、発達には**順番**があります。子どもは、**十分にふざけ、おどけ、ばかを言い、けんかをし、悪さをしなければ**、まともな大人にはなりません。早く大人にしようとするれば、小利口のつまらない人間か、外見だけを整えた偽善者か、心の深部に不満を抱えた犯罪予備者にしかならないのです。

高校生になり、二十歳になって「狂って」いる青年は、幼少期—小学生までの時期に、十分にばかを言い、やれなかった(**親や教師によって抑圧された**)子どもたちの姿です。

順を踏むこと、「飛ばし」の英才教育をしないこと。これは教育の原理です。子どもは**自分でいろいろと試してみる時間的-精神的余裕**を持ってないと、主体性を持ち、自分で考える人間にはなれないのです。子どもを「病気」か「ロボット」にするために必死で努力する！？愚かです。

生活＝体験＝直観に根差した**「意味」の分かる心と頭を育てる条件は、子どものありのままの心を受け入れ愛すること、急がずに順を踏むこと**です。必要なのは、「おどけ・ふざけ・悪さ」を許容し、楽しむ心です。一段ずつ階段を上ること。「飛ばし」をすれば、**内的には悦びをもてない人**となり、不健康な人生を招来します。

なお、ここで述べた教育思想は、会社での社員教育もその原理は一緒で、応用できます。この前にお示した『**日本オラクル**』の初代社長・佐野力の社員教育は、わたしの理念を具現化したものが中心で、わたしのインタビュー映画がつくられ、オラクルの全社員(15年前で1300名)はそれを見てもいますよ。



佐野力さん 49歳
1990年 武田宅で
撮影 武田

5. 意味論抜きの事実学(パターン知)の累積は、死に至る病

内田⇒武田

武田先生、長くなりましたが、考えていたインタビュー内容を送ります。

解答のパターンや型を覚える勉強から、「意味」を把握し、理解する勉強への転

換が必要ということですね。教科ごとのコメントもありがとうございました。

今のような大学受験中心の勉強方法では、パターン知習得型の勉強は、変わらないようにも思います。今やこのような勉強方法は、中国や韓国にも影響しているようにも見えます。

また、日本オラクルの現場で武田先生の教育論が具体的にどのように活用されたかは、会社員として興味深いところです。

今の大学の現状は聞くところに、一層に企業人材育成組織となっているようです。大学の機能は、如何に会社に役に立つ人材を育てるかにあるのでしょうか？それとも社会に役立つ人材を育てることにあるのでしょうか？企業は、パターン知的能力を求めているのも事実です。そこを変えないと教育も変わらないかもしれません。

暗記力がすぐれ、パターン知習得型勉強法の標準偏差上位者を企業が求めるのです。つまり企業の人材採用も確率論なのです。そのようなパターン知標準偏差上位者をたくさん採用すれば、まずは外れが少ないということなのでしょうね。

さて、もう少し伺いましょう。私は、子供の教育現場のことは分かりませんので、会社員体験をお話して、先生のご感想をお聞かせ下さい。私の経験上、会社員に求められている能力は以下のような能力があると思います。

管理職や営業職は除き、事務職・サポート職の例でお話しします。まず

- (1)として事務処理能力。
 - (2)プレゼン能力。
 - (3)企画立案能力。
 - (4)リーダーシップ能力。その他
- というところでしょうか。

特に(1)は基本的な能力で誰もが直面します。早く、正確に解答する。そしてアウトプットを出す人が評価されます。最近では電卓でなく、Excelを使ってのデータ作成やデータ分析が中心でしょうか。エンドユーザーコンピューティングとかいって、社員がパソコンを使って会社報告用のデータの集計やデータ分析を行います。

(1)は、最も基本的な能力で、これなくしてビジネスパーソンは勤まりません。そこで道具になるのは、パターン知的勉強方法で練習した脳と身体というところでしょうか？

(2)もビジネス書を読むとパターン知で解決できるそうです。

(3)以下は、ちょっとパターン知だけでは対応が難しくなります。そこで道具になるのは、武田先生が目指している意味を捉える勉強ということになると思いま

す。意味など考えている暇があれば、早く正確に解答を出せというのが今の勉強の中心でしょうが、(3)以下には対応は困難でしょう。つまり、「いかに課題に対して問題解決をするか」という能力が問われます。本来は、そこを鍛え深める教育、その勉強方法が求められるのでしょう。

私が京都フォーラムでお会いした、大学の真摯な先生方は、ジョン・ディーイのいった教育哲学(道具主義や実験主義など)を探求し発展させようと、真剣に子供と向き合っている先生も多かったです。

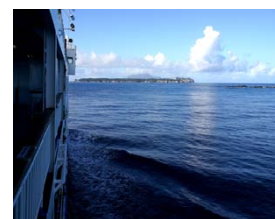
江戸以来の実学を中心とする読み書きそろばんの知識は、ビジネスでは今でも一定の有効性があります。その強力な現代版がパターン知習得型勉強法でありパターン知習得型教育ということでしょう。ただ教育は、人生・生活に必要不可欠なものであり、教育の一部を利用しているのが、ビジネスという行為です。それがすべてと思うのは錯覚です。生活の中での経済的な領域は、最も重要なことです。ただ、人生、生活は長く、経済生活を始め様々なことがありますね。いろいろな問題にぶつかるでしょう。おそらく、その時にパターン知習得型勉強をしてきた人と、意味論的課題解決型勉強をしてきた人とは、大きな差が出るのではと思うのです。如何でしょうか？

武田=>内田

内田さん、

「武田哲学へのインタビュー」-7回目は、自問自答になっていますので、お応えは不要～～(笑)

もちろん冗談です。では、ハードでとても有意味な「式根島キャンプ&ダイビング」(第40回!)から帰りましたので、お応えを書いています。



式根島が目の前！
撮影 武田

まず、現代の教育が大企業のビジネスに適合し、それなりの意味をもっているのならば、内田さんも言われる「生活では経済が一番大事」と符合するわけですから、このままで「よい」でしょう。大手受験塾が、「東大〇〇名！」と宣伝する教育が「正しい」のです。さすがは、駅前はどこも進学塾のニッポン！この路線で進めば間違いありません。

だいたい、受験塾で頑張って東大に入ることに失敗した輩がウダウダ言っているだけのことで、彼らは負け犬ですよ。東大から官庁や花形大企業に就職して人々の上位に立ち、リッチな生活をしている勝ち組が羨ましいのでくだらない理屈を言っている。ソクラテス云々とか言ったって、実際の話、それだけのことでしょ。

そのソクラテスは、「魂の吟味のない生活は、生きるに値しない」とアテネ中で振れ回り、ついに逮捕 - 投獄 - 死刑となったわけですから、世の中、逆らっちゃ、いけません。今で言えば、安倍総理など戦前(=明治維新政府のつくった「天皇現人神」時代)からのエリート家系の政治権力者には頭を垂れることが大事、というのがわがニッポン人の常識です(笑)。エリート家系に寄り添いたい人は、「日本会議」に入り、126歳の長寿を全うした神武天皇から125代続く男系男子の遺伝子万歳！と言わねばなりません(笑呆)。

逆説的なもの言いはこれくらいにして、では、ストレートに。

確かに内田さんの言われる情報処理の技術知は、必要です。でも、それは、受験優秀校に入るための受験知で養われるものではありません。わたしの周りの子どもや大人を見ると、有用な情報処理や的確な情報アクセスができるのは、受験知で固まった頭の持ち主よりも、直観力に優れた人です。直観力は、豊富な直接経験(=心身全体での会得)を持たないと育ちませんので、現代の日本(韓国や中国も?)の教育は、どうもこの点でも的外れと思います。

1990年の創設時から10年間の日本オラクル(株)で、初代社長の佐野力さんが、わたしのフィロソフィを役立てたのは(正確には、オラクル社長になる3年前・1987年の日本IBMの子会社・S&I社長の時から)ただの情報処理能力やソフィスティケートされた知力では、新たな世界を切り拓くには不足であり、役立たないと感じ知ったからです。それは、佐野さんの息子が「ソクラテス教室」に通って、わたしの教育思想と実践を知ると同時に、彼自身もわたしの主宰する「哲学の会」の熱心なメンバーとなり、書物での学習と共に、学校教育と政治の改革にも加わり、わたしの哲学と教育と社会活動を目のあたりにしつつ共に行動されてのことでした。

話を戻しますが、内田さんが上げられた3と4は当然なのですが、1の技術的な知にしてすら、「何のため」を問わないパターン仕込みでは、ほんとうの有用性は持ちません。「私」の人生における位置づけを欠いた技術知や意味論なき丸暗記は、人間を人間にしないために必ず知の墮落を招き、人間をダメにします。はっきり言えば、なにがしかの精神疾患か昆虫人間(紋切型で生きる単なる事実人)しか生まない、ということです。

ソクラテスは、「恋愛」(恋い焦がれる心)をキーワードにして自身の原理的思想を開示し、その営みを、〈恋愛+知〉という造語で現わしましたが、それが、ソクラテスによる造語=プロソピア(フィロソフィア) =「恋知」です。その営みを下敷きとして持たないと、「知」とは人間性にとっては何の意味もない「空中浮遊」に過ぎなくなります。現実とは人間の現実である限り、意味と価値=フィロソフィの世界なしには、【非現実】にしかありません。

ところが、ネクロフィリア的な傾向をもつ人は、空中浮遊している自身の知=単なる事実学の累積を強引に根付かせるために、ニッポンの伝統や皇室の連綿性という特定の解釈に基づく「物語」を自他に信じ込ませようとします。生身の人間の〈感じ・想い・考える〉ところにつく自然性とは異なるイデオロギー操作=洗脳行為

をしないと、空中浮遊の知は消えてしまうからです。絶えざる洗脳教育・情報コントロールが必要になるわけです。五感・心身全体による赤裸々な世界の感得に基づく知とは縁遠い「宗教的」(国体思想)な知です。

内田さんの上げられた2のプレゼンも、パターン知に基づけば、よいとされる雛形にハマられた言説に陥ります。既成の思考と言語使用の枠内でしか発想していない「優秀な」プレゼンでは、外形だけ立派で少しも面白くありませんし、深く人の心を打つことで新しい世界を切り開くことは到底不可能です。既存のラングに縛られない心、幼子や詩人のように「言語中心主義」的発想から開放され、想像力による自由で広大なイメージの世界に遊ばないと、新たな言説は生まれません。そこまで企業が求めているかどうかは知りませんが、そういうのびのびとした言葉、種々の囚われから解放された言葉・言説でないと、現実には動かないのです。

最後に人間の生の原理を確認します。

わたしたち日本人の多くがそう信じている「現実」(金、地位、学歴、資格など)が先にあり、理念やロマンの世界は二番目、という常識は、真っ赤なウソであり、それこそヒドク【非現実的】な人間の見方だということです。この簡明な原事実が了解できないから、何をしようともいつまでも「人間を幸福にしないシステム」から逃れられないのです。

ソクラテスの言う「恋する心の次元」(憧れ想う世界・理念やロマン)がないと、実務的で「現実的」といわれる世界(「恋しない心の次元」)は、意味付かず、価値を持ちません。人間の生にとってはじめにあるのは、「恋する心の次元」なのです。この憧れ想う世界を育てることがないと、人間の教育は「人間の教育」にならず、動物の調教や品質管理と同レベルにまで引き下げられてしまいます。そうなれば、人間性は元から消えるのですから、企業活動に役立つか役立たぬかというレベルの話ではなく、もうおわっていて、すべて論外です。

つづく。

内田⇒武田

それでは、インタビュー続行します。前回の先生の独白？は誠に面白かったですね。本音が出ていましたね。たしかにパターン知養成機関の受験産業も社会的な必要性があるのでしょうか。ただそんなことより、先生が最後に述べた意見には、まったく感動します。下記に引用しましょう。

『わたしたち日本人の多くがそう信じている「現実」(金、地位、学歴、資格など)が先にあり、理念やロマンの世界は二番目、という常識は、真っ赤なウソであり、それこそヒドク【非現実的】な人間の見方だということです。この簡明な原事

実が了解できないから、何をしようともいつまでも「人間を幸福にしないシステム」から逃れられないのです。』

『ソクラテスの言う「恋する心の次元」(憧れ想う世界・理念やロマン)がないと、実務的で「現実的」といわれる世界(「恋しない心の次元」)は、意味付かず、価値を持ちません。人間の生にとってははじめにあるのは、「恋する心の次元」なのです。この憧れ想う世界を育てることがないと、人間の教育は「人間の教育」にならず、動物の調教や品質管理と同レベルにまで引き下げられてしまいます。』

私は、日常の生活に忙殺されていると「恋する心の次元」を忘れてしまいます。怖いことです。仕事でも損得ばかり考えて心身で納得するような仕事のやり方ができているか？不安です。

子供たちもパターン知の詰め込み勉強や、過度な部活活動などで、心身ともに疲れ切っているのではないかと心配です。

また、現代の政治学でも「リアリズム」という視点を重要視していますが、果たしてそのリアリズムが本当にリアリズムなのかどうか？疑問ですね。現実主義の陥穽を常に意識して、生活をしまししょう。先生がいわれるように、金、地位、学歴、資格などの現実が先にあり、理念やロマンの世界は二番目という思想は、自らの軸を他者(他人や社会)に置くことになります。つまり、自らの主観性も二の次になってしまいますね。これは、主観性を消去する考え方です。

お金は生活者にとっては最も大切なものです。ただそのお金を稼ぐ「個人」を創るのは、現実ではなく、理念やロマンだということをもっと強調すべきだと感じます。ここのところは、誠に重要な視点だと考えます。

そこで、白樺教育館に通う子供たちに、先生は理念やロマンということを具体的にどのように説明しているのでしょうか？お父さん、お母さん方は、口では『お金より心だ』といわれる方もおいででしょうが、なかなか子供が納得するように話せないと思います。その点を伺いたいと思います。

武田=>内田

内田さん、わたしの言わんとする芯を的確にとって頂き、感謝です。

では、お応えです。

善美に憧れる生き方、理念やロマンを育む生き方をこどもたちに伝えるための特定の技術はありません。



2015年63歳 教育館にて

それは、こどもと関わる人が、わたしの場合なら、わが子と白樺に通う子どもらですが、自らが憧れ想う心をもって日々を生きること、それを繰り返し見せる・示すことです。

その場しのぎであったり、目先の損得勘定であったり、即物的な現実主義の言動であったり、夢や希望や向上心、理念やロマンを抱かずにルーティンワークで日々を過ごしたり……という生き方を大人がしていたのでは、こどもも、せいぜい「小賢しい人間」にしかありません。

具体的には、生活世界の中で、遠くを見る（無定形の空や雲を見る）習慣をつけることです。これはとても効きます（笑）。

理念やロマンをつくるには、自覚的に善美の世界をイメージする取り組みが欠かせません。自分の抱く人や自然や物や事象への魅力的な像を反復し・変容させ・広げていく営みが、理念やロマン世界を生みだすのです。

こどもたちは、大人の日々の姿をみることで成長しますから、こどもの教育とは大人の生き方の問題です。

フィロソフィのほんとうの威力は、「言語ゲーム」(ヴァイトゲンシュタイン)の枠内にはなく、現実に生きる人間のふるまい、目と顔の表情であり、話し方であり、声の出し方であり、もちろんその内容であり、姿勢であり、歩き方であり、……から発せられる善美の輝き・力なのです。それがよいものでないと、言語ゲームは、役に立たないというよりも有害になります。ソクラテスが『国家』の中で、「育ちのいかかわしい者をフィロソフィーに近づけてはならぬ」と述べているのは、実人生で善美を求めている者がフィロソフィを学ぶと、深い言葉を使って人の上に立つ方法としてフィロソフィを用いる＝悪用するからです。フィロソフィの核心中の核心は、魅力的な理念やロマンをもって現実に生きる人となるところにあります。

その営みを支えるのが「ネオテニー」という人間の特性ですので、その自覚を深めるように日々を生きることが必要です。こどもと対等になり交わるのはとても大切ですから、いろいろな機会を見つけて遊び学ぶこと。それは大人自身のためでもあり、相互の徳と得です。

なお、最後に「映画鑑賞」の実践例を一つ、以前のblogから。

中1の授業で『ローマの休日』を見る。恋におちる 哲学＝恋知の核心をつかんだ。

2014-09-12 | 教育

中学1年生の女の子三人に『ローマの休日』を見せました。体育祭の一日練習で疲れていたもので、数学はやめて、映画



鑑賞にしたのです。

皆、後半のアン王女と新聞記者が「恋におちる」場面からは、引きずり込まれるように見入り、深く感動した様子でした。顔は紅潮し、輝いています。

わたしは、

いまのが哲学＝恋知だよ、と話し、

「恋する次元」＝聖なる狂気と「恋しない次元」＝俗なる正気の対比が見事でしょう、と言いました。

「恋におちる」ことで、アン王女は一晩で別人に変わった＝精神の自立を得て一人の人間となったこと、現実的な得(多額の報酬)を超えて、「恋する次元」の高みに昇った新聞記者とアン王女との心と心が通い合う場面は、この世のものとは思えない美しさ＝善美のアイデアに直接触れるかのような感動を与えますが、そのアイデアの世界を垣間見た中学1年生たちは、一瞬にして、哲学＝恋知の核心を掴みました。上気していました。

「ただの日本人ではなく、優れた人間になるためには、善美に憧れる精神が必要で、それを分からせてくれるのが、「恋」だよ。恋は、人間の人間的な生の象徴と言えるよね。二千数百年前の古代ギリシャでソクラテスが示した「恋する次元」(＝聖なる狂気)こそが、現実的な利害損得の「恋しない次元」(＝俗なる正気)を支える基盤で、その逆ではないこと、それが恋知の意味なんだよ。」

黒板には、

「恋する次元」＝聖なる狂気 と「恋しない次元」＝俗なる正気、――恋知・哲学の核心

恋愛が精神的自立を生む 人間の生きる意味は、善美に憧れる恋心にある。

と書きました。

明治政府が「恋愛」を忌避し、日本の長い伝統を壊して「見合い結婚」を進めたわけを話しはじめたら、もう途中で、皆は、納得・ナットク・なっとく。深い強いよろこびで目と顔がピカピカ 光っていました。

数学以上に価値ある授業になりました。

付録

強く安倍首相を支持する若者(女性)とのネット対話―「教育の本質論」について。

2015-09-17 | 教育

以下は、安保法制反対デモの「ユーチューブ」映像を媒介にしてのやりとりです。

yさんは、**安倍首相の強い支持者**ですが、以下にあるように、途中から【教育】がテーマになりました(緑字の部分)

内田卓志さんの「武田哲学へのインタビュー」の6回と7回が教育問題でしたが、その補足のようになりました。

y => 武田

心の芯が優しくない人ってどのような人ですか？興味あるので教えて下さい。

武田 => y

幼少期に、その子の存在のありのままを受け入れられ、愛されて育った人は、自分を愛せるので(自己存在の肯定)他者を受け入れ、愛することもできます(自分の我と他者の我は一つメダルの表裏)。

表向き(外面)ではなくて、心根が優しいとは、実存(社会人とか国家の一員という前の赤裸々なわたしのありよう)の次元で、自他を愛することができる人のこと、と言えます。

y => 武田

武田康弘先生へ 愛されて育ってないとはどのような人ですか？具体的にお願ひします。

武田 => y

親の考え方に従わされて(特定の理想像を要請される)、ありのままの心を認め

てもらえないと、こどもは、自己の存在を肯定できなくなります。いつも「わたしの想いや関心」が否定されて、ある「型」に誘導されると、外面優先で形式的な言動に陥ります。

そういう人は、自分自身の心身と正面から向き合うことを恐れます。

具体例＝わたしは「こう思う」と語らず、日本人は「こうすべき」というように語ることで、生身の自分としての責任を負わずに「国家に逃げる」。そのために、わたし固有の内的世界が育たず、実存次元＝人として一番大切な領域が貧弱。

そういう人は、他者の自由な言動を嫌悪し、特定の思想を国家権力で押しつけること、そのような教育をよしとします。

y => 武田

モラハラってやつかな？先生の見解を総合評価すると無秩序になるような感じですけど。それって我がままの分類になりませんか？そのラインは誰がどのように判断するのですか？

武田 => y

yさん、わたしは、息子を育てた経験と、孫と深く関わっている経験からも言えますが、こどもの我儘を認めて一緒に遊ぶ＝心身全体で対話すると、こどもは、内的に(強制ではなく)成長し、一段づつ階段を昇ります。

だんだんと我儘を超えますが、それは、我儘のままだと、自分の世界が広がらず、よい関係性が築けないことを体得するからです。こどもはよく受け入れられ存在を丸ごと肯定されると、内的に次のステップに進みますが、否定されると自我はうまく燃焼できずに、そこから内的成長をやめてしまいます(外の目に怯えるだけの存在になる)。

そうなる、内側からの秩序の形成に失敗してしまいますので、悲劇です。

「秩序＝善美の基準」は、各自の心であり、それは、存在の肯定(愛される)の中で育つと、誰でもが先験的にもつ能力(真偽、善悪、美醜を知る能力で、人間の言語使用と同じく先験的)ですから、開花します。

また、モラルの各自の違いは、公共性(互いの対等性と自由を認め合う「対話」によりつくられる妥当性))に基づいて調整されます。ここに、政治権力の意思が入ると、民主政は元から崩れてしまいます。「国家意思」という見方ではなく「公共意思」という見方が大切になります。

y => 武田

その国家意思は公共意思を投影した姿なんですけどね。民主主義という形で秩

序が保たれる。人間の育成にマニュアルが存在するという錯覚は、先生が自己投影しただけなんですよ。

武田 => y

「人間の育成にマニュアルが存在する」 ---という考えとは対極なのです。個々人の存在、赤裸々な意識からの出発ですから、予め固定された「主義」を持たないのです。マニュアル的思考とは逆になります。一人ひとりの自由と責任による。

公共思想と国家思想がイコールになることは、残念ですがなかなかないことです。市民の公共性こそが本来の公共性なのですが、それと乖離する場合は現実には多いです。政治レベルの話で言えば、今回の安保法制もどの世論調査でも、いま通すべきではないとの答えが、いま通すべきとの答えを大幅に上回っています。公共意思と国家意思(議員意思)が異なっている一例です。

y => 武田

内的成長を止めると思われた子供は先生が接した子供限定ということですね。それが全てではないということですか？では最初に先生が述べた【心の芯が優しい】という人は定義化できないので、個々の感受性に頼るしかないということですね。市民の公共性と国家思想がイコールでは無いというのは個々の思想が反映されるのが理想と思いますが、議会制民主主義なので多くに支持された政党が法をつくり、国会で承認され国民が好き嫌い関係無く遵守することは、未来永劫変わりません。メディアの偏向報道については、反対賛成双方が言い合っていますのでそれも感受性～の想像の領域になるのでしょうかね。

武田 => y

個々の感受性、あるいは、個々の感じ思い考えること、に付く、といういは、人間の営み・活動を考える原理中の原理です。それを超えることはできません。

また、選挙で選んだ議員がつくる内閣に、あらゆる政策を一任したと考えるのは、近代市民社会の民主政では間違いです。国を左右するような大きな問題では、国民投票が必要ですがその制度が日本にはいまだありませんので、その問題を争点にして総選挙しなければなりません。安倍自民党がそれをやらないのは、負けることが分かっているからです(世論調査ではっきりしている)。民意とは異なることを強行しようとするので、大きなデモとなり、日本を代表する世界的な文化人の多数が反対を表明し、法律学者や弁護士の連合も反対を表明

し、東大や京大や多くの大学の教授たちの多数も反対しているのです。重ねて言いますが、各社(自民党を支持するマスコミを含め)の世論調査で、この法案を通すことに賛成の人は少数なのです。

y => 武田

反対派の人物像は先生の希望であり定義すらないということですよ。だとしたら反対派がマジョリティということがイマイチです。あくまでも個人的な例えを書くと、デモ参加者を全国で百万人潜在的反対者を5倍と仮定しても5百万人です、それに対し日本の有権者数は1億5千万＝反対派はたったの3%程度です。残り的人達は賛成派ということになります。先生はメディアの内閣支持率を根底から信用していないのに、どうして反対派がマジョリティという結論に至ったのでしょうか？物理的に定量的に具体的に教えてください。それともメディアを都合良く信用しただけで、個人的な確定根拠は無いという残念な見解ですか？

武田 => y

人物像とは、像ですから、もちろん、わたしの経験から直観したものです。絶対に、という保証はありませんが、絶対にという保証はどのような事柄でもないですよ。

なお、この法案への賛成(今国会で通すべき)がかなり少数なのは、各種の世論調査で明らかであり、論をまちません。

6. 宗教についての対話

内田=>武田

そろそろ武田先生への教育についての質問を終わり、次のテーマについて伺おうかと思いますが、一点申し上げておきましょう。

それは、デューイの研究家の藤井千春教授が、『「山びこ学校」の教育的意義の再評価 ―ジョン・デューイの「公共性」概念を観点にして―』で述べている点です。長くなりますが引用します。



2015年63歳 教育館にて
武田康弘
撮影：ソクラテス教室小学生



内田卓志さん
2015年49歳上野で
撮影：武田康弘

(1)「初期社会科」の構造

「昭和22年度版学習指導要領社会科編(Ⅱ)(試案)」では、社会科の学習活動について、「生徒の経験を中心として、これらの学習内容を数個の大きい問題に総合」と述べられている。その理由について、次のように示されている。

「(一)学校内外の生徒の日常生活は常に **問題を解決して行く活動** にほかならない。

(二) 学校は生徒にとって重要な問題を解決するために必要な経験を与えて、生徒の発達を助けてやらなくてはならない。」

「初期社会科」では、**自主的に調べ、考え、判断して行動のできる** 民主主義社会の建設を担う、合理的で自律的な人間の育成がめざされた。それは**戦前・戦中の教育が上からの命令に従順に従う人間を育成してきたことに対する**、そして、そのことが軍国主義・超国家主義へと国民を導いたという反省に基づいている。「初期社会科」では、合理的で自律的な人間の育成のために、子どもたちが自分たちで事実を調べ、自分たちでその事実の有する意味を究明し、どのように行動すべきかを考えるという学習活動の方法、すなわち問題解決学習が採用された。子どもたちのそのような学習活動を展開されるために、「実生活で直面する切実な問題」を取り上げることが要請されたのである。

以上のように、戦後の初期社会科教育理念には、**武田先生の教育論と共通する思想**を読み取れます。この教育理念には、ジョン・ディーイの教育哲学がベースにあるようです。かつて、敬愛する経済学者の宇沢弘文先生も、戦後の旧教育基本法の教育理念には、ジョン・ディーイの弟子たちの力が大きく関与していたと、述べられておりました。私は、詳しくは存じ上げませんが、重要な視点と思いましたが言及しました。

さて、次に**宗教について**考えていきたいとおもいます。宗教については、武田先生は、宗教家や信者との多くの対話を重ねておいでのようです。武田先生の経験について何う前のイントロとして、竹内芳郎先生の宗教論について述べたいと思います。竹内先生は武田先生の恩師とのことで私も数年前お会いしました。私が大学生の時に最も影響された宗教論のひとつが竹内先生のそれでした。(『意味への渇き—宗教表象の記号学的考察』)この本のポイントの一つを私なりに簡単に説明すると以下のようになると思います(武田先生、間違っていれば訂正してください)。

普遍宗教と呼ばれている宗教には、超越性原理(普遍性原理)が備わってい

る。仏教なら「慈悲」とかキリスト教なら「愛」とかいうものだと思います。竹内先生は、もっと精緻に分析しています。そのような超越性原理は、平等思想や人権思想の根拠となり、社会の民主化や反戦平和思想にまで及び、また、超越的普遍者を持ち、超越的で普遍的な(信仰)対象を持つことによって、現世の一切を存在論的にも価値論的にも相対化してしまう視点を形成できると言っています。「愛とか慈悲のような超越性原理」を否定する存在や価値があれば、徹底的に批判し闘うということだと思います。そのような普遍宗教を竹内先生は、非常に評価していたと思います。神道のような宗教には、そのような力は望めないわけです。

イントロはそろそろ終わりにして、武田先生の宗教観について、また個人の主観性との関係にまで踏み込んで順次お話して頂ければ、たいへん幸いです。

内田卓志

武田=>内田

内田さん、デューイの教育論、整理して示して頂き、ありがとうございます。わたしも「プラグマティズムの哲学者であり社会思想家で教育者でもあるデューイ」を学生時代に読み、優れた思想家だと感心しました。

わたしは、私塾というたぶん日本的な伝統の方法でこどもたちと、また成人者との交わりをしてきましたので、デューイとは直接には関係しないのですが、彼の教育思想と実験教育が戦後日本の民主教育の柱になったのはよく知っています。

わたしの場合は、わたしの実存を基底としての教育なので、はるかに個人的です。実践は小さく、一人ひとりに相対するもので、いまの日本の状況では、「小ささこそが大切」との思いがあり始め、その理念と方針に従い40年間続けています。

教育は人間の教育ですから、人間の存在論的事実を踏まえることが前提で、よい教育とは、幼子の示す赤裸々な人間性を愛することから出発します。そのため教育への基本姿勢は自然と似てくるものと思います。特定の思想や理念に縛られず、一人ひとりのありのままの存在をよく知り、そこからその都度発想するわけです。原理は示せますが、個々に対応するマニュアルはないのです。

では、本題の宗教についてです。

わたしの場合は、何について考えるのも、私自身の赤裸々な生の現実からですので、宗教についても同じで、一般的宗教論ではなく、私の宗教への見方です。

わたしの父は、浄土真宗の門徒で学生時代は檀家回りをしていました。植木等（後年クレージーキャッツの一員）と共に文京区の真浄寺で修行していたのです。祖父が僧侶でしたので。

しかし、父は、わたしに宗教や宗派のことなど何も話しませんでした。わたしも高校生までも無頓着で、たまたま野間宏の書いた『歎異抄』の解説本を読み、親鸞というのはなんと凄い人だと感嘆し、それを父に話すと、親鸞は自家の宗派の開祖だと言うのでビックリしたのです。これでは笑い話ですね。

わたしにとって宗教とは一つの思想であり、信じ込むこととは違いました。まして、人格をもった神が実在するという話は、荒唐無稽であり、それは物語の登場人物が実在すると信じることと同義で、長年の間、ほんとうにそんなことを信じている人がいるとは思っていませんでした。大学になり、キリスト教の信者は現代でもなお神が実在すると信じていることを知り、驚くと同時に呆れました。

哲学徒であるわたしは、人間の生き方や生きる意味を、自分の頭でよく考えてだんだんと確かで豊かなものにしてきましたので、教典・経典を読んで覚えたり、信じたりすることとは無縁でした。どのような書物も自分の経験を踏まえて自分の頭で考えるための手段であり、それ以上でもそれ以下でもなかったのです。だから、後年、プラトンによるソクラテスの対話編『パイドロス』を読み、文字は死んだ言葉であり、いま話される問答こそ生きた言葉であって、それがフィロソフィー（哲学・正しい訳語は「恋知」）だという主張にとっても感心したのです。

宇宙の仕組みが次第に明らかになり、生命の誕生や進化が化学的にも解明されてきた後でなお、どこかに人格をもった神がいて、すべてを見ている、とか人間や宇宙のありようは神の計画だとかいう話は、あまりにも愚かしく子ども騙しでしかありませんから、そういう類の話はなしにして次に進もうと思いますが、いかがでしょうか？

紀元後415年（ちょうど1600年前）にキリスト教徒たちによって惨殺された女性教師（フィロソファー・天文学者・数学者）のヒュパティアの言葉はじつに見事です。

「形式を整えた宗教は、すべて人を惑わせます。最終的に自己を尊重する人は、けっして受け入れてはなりません。」

「神話、迷信、奇跡は、空想や詩として教えるべきです。それらを真実として教えるのは、とても恐ろしいことです。子どもは、いったん受け入れてしまうと、そこから抜け出すことは容易ではないのです。そして、人は信じ込まされたもののために戦うのです。」（英文からの翻訳は武田）

最後に、竹内芳郎氏の「超越性の原理」についてお応えします。

世俗の損得や利害という価値、また、有名人であることや収入が多いことなど、いわゆる「世俗の価値」に縛られずに真実を探求すること・善美への憧れをもつことは、子どもも、というより子どもや青年ほどよくしています。

それを竹内芳郎氏のように、世俗の価値を超越した価値＝「超越性の原理」をもっているからだ、というのは、結果からみればその通りなのですが、それを氏が主張するように「超越性の原理をもたねばならない」とすると、特定の思想的装置になるでしょう。ロマンや理念の世界は、世俗の価値とは切れた別世界と表象されるわけです。

わたしは、よき世界への憧憬はこの世俗の世界の只中にあり、真実の探求や善美への憧れ(竹内氏のいう超越性)は、日常生活の中に根を張るものと思います。生活世界の中に世俗の価値に縛られない価値は存在する、と見るのです。生活世界の外に「よき見方」があるのではなく、生活世界の中の「或る領域」にそれらはあると考えるのです。

善美への憧れや真実の探求は、世俗の価値を否定するのではなく、それらを包んでより普遍性の大きな価値に引き上げていく営みだ、とするのが武田思想の中核です。世俗の価値を「否定」するのではなく「対立」することで、世俗の世界に意味と価値＝光を与えるのです。その光がなければ、世俗とは暗闇にすぎません。そうなれば、善美と世俗の価値の領域は両方とも成立せず、ただ無自覚に流れゆく惰性世界があるだけとなります。

竹内氏の「超越性の原理を持て、」という考え方・言葉は、**フィロソフィーを「一神教化」**してしまうので、とても不味いと思います。以前に書きましたように、フィロソフィーとは【超越的真理】を求めるものではなく、また【世俗の価値】に従うことでもなく、みなが深く納得できる【普遍的な考え方】を提示する普段の努力です。自問自答と問答的対話によりだんだんと優れた見方をつくる作業だ、というのがわたしの基本思想です。

武田康弘

7. 宗教についての対話 2

「超越性」という発想はすでに無効。「宗教表象」による現実への応答は限界に。

内田⇒武田

続いての質問です。内田

私は、フィロソフィーとは、みなが深く納得できる【普遍的な考え方】を提示する
普段の努力という基本思想に共感致します。先生のフィロソフィーとは、**世俗の
価値を否定するのではなく、世俗の世界の只中にありそれを包括して普遍性の価値
に引き上げていく行為**だと伺いました。まず、三点ほどご質問します。

1) 竹内先生が言う、「超越性原理を持つ」という考え方は、宗教に限定してのご
主張ではなかったのでしょうか？**フィロソフィーにも竹内先生は、超越性原理を求
めておいでなのではないでしょうか？**

2) **普遍宗教の超越性原理とは、武田先生の考えるフィロソフィーとどのように違
うのでしょうか？** 私は仏教徒なのでゴータマ・ブッタが説いた思想について考え
ます。ブッタは、普遍的な原理ともいえる「自灯明・自帰依」及び「法灯明・法帰
依」を主張したとされています。この思想は、普遍的であると共に、超越的である
とも言えます。決して絶対的な真理を言っているわけではありません。生活世界
で苦から脱し、よく生きるとは、何であろうかという、原理的な問いについて、ブ
ッタが考えた思想であり姿勢でありました。ブッタの悟った生き方の実践とその継
続、心身を通して自覚的に内在化させていく行為や働きが仏教の説く、超越性
原理であると思っています。ブッタの言った超越とは、内在的な超越であり、「解
脱」を求めるといことでしょうか。本来の自己に目覚めること、そこに一つの神、神
そのものをも必要としない仏教の超越性が、普遍性を求めるフィロソフィーと、共
通の地平が開けるのではないのでしょうか？私は、武田先生のいう主観性の知の
問題と関係すると思ひ、仏教徒としての私の考えるブッタの思想に関する私見を
申し上げました。この考えが妥当するかどうか及び、他の普遍宗教については、
わかりませんが。

3) 最後に先生のフィロソフィーでは、「対立」がキーワードと考えます。私も共鳴
しておりますが、**宗教では、「対立」は必ずしも必要ないと思う**ことがあります。例
えば、親鸞や良寛の思想、親鸞でいえば「自然法爾」という思想がありますね。
親鸞思想の到達点と言われておりますが、対立を超えたところに宗教的な救済
があると思うのです。フィロソフィーと宗教の違いかもしれません。親鸞を敬愛す
る武田先生は、如何に考えられますか。

専門用語を多く使いましたが、武田先生フォローして頂ければ、幸いです。

内田卓志

武田=>内田

お応え 武田

内田さん、共感、嬉しいですが、
「世俗の価値を否定しない武田哲学」という点が



『恋知』—「私」の生を輝かす営み
(武田康弘著・白樺教育館刊)

3)の質問とも関係しますので最初にお応えします。

わたしは、世俗の価値を「否定」しませんが、世俗の価値と「対立」することは多々あります。「対立」することではじめて「一面的な世界」が変わります。対立がないと、のっぺらな平板で、同一の価値観で染め上げられたエロースのない世界に陥ります。それは、人間を幸福にせず、灰色で淀んだ空気を生むだけです。

善美への想いを座標軸として日常を生きると、世俗の価値と一致しないことがあります。その時は、明確にその理由を述べ、「対立」することが必要です。その営みなしでは、世界は色づかず、活気つきません。これは人間的なよき生の原理なのです。

では、1)について。

竹内芳郎氏の超越性の概念は、「宗教に限定したもの」ではまったくありません。

わたしが27年前に企画し主宰した我孫子市民会館での講演会『盗まれた自由』（1988年10月9日）の様子は、『ポストモダンと天皇教の現在』（ちくま書房刊）の冒頭論文になっていますが、そこには以下のようにあります。

「日本人の集団同調主義に対する『個人の自立』は大切だが、それだけでは不足で、『超越性の原理』をもつことが必要だ。それは世俗の価値を相対化する原理なのだ。」(要旨)と述べ、超越性原理をもって現実を生きることの必要が力説されています。

そこから強い超越性原理をもつキリスト教への高い評価が出てきます。

したがって親鸞思想を評価しつつも、超越性の程度において劣ると言います。阿弥陀仏という人格神を絶対神として立てているが、その思想は法然という人間への信頼→帰依であり、中途半端である。キリスト教は、「生き生きとした人格神を絶対他者＝超越者として定立する」ことにおいて徹底しているゆえに世界的な普遍性をもった、というのが竹内芳郎氏の見方です(詳しくは『意味への渇き』5章D)。

以上のような宗教の見方と価値評価は、いまでは有用性があまりないと思いま

す。人間の生のありようを宗教表象を基にして考えるということ自体にわたしは賛成しません。そういう役割を宗教がもった時代はすでに終わっています。

次に2)ですが、

わたしの「私の善美への憧れを座標軸」に生きるというのは、生活世界の中に「善美」を見たり感じたりすることですが、それは、子育てをする中で、あるいは、他者との会話の中で、あるいは、音楽を聴き、絵画や彫刻を見る中で、あるいは、本を読む中で、あるいは写真を撮る中で、あるいは散歩する中で、感じ知ることを基に思考して得られる視座です。

その中に、仏典や聖書を読むという営みが入ってもよいわけですが、それらが特別な地位を占めることはありません。宗教書もさまざまな体験・経験の中の一つに過ぎません。

わたしの場合は、とりわけ幼子→こどもたちとの交流の中で見聞きすることが深い思考を誘発し、善美への新たな視座が開けることが多いです。なまの経験が頭を刺激するのです。また、音楽を聴きながら思考することもありますし、いつもの手賀沼遊歩道での散歩中に新たな見方・考え方・生き方の発見もします。

ブッダの内在的普遍性の追求→到達点と、わたしの恋知との異同についての質問ですが、それはどうでしょうか。何が同じで何が違うかは、判然としません。わたしは釈迦の思想や親鸞の思想にも感じ入ってきましたが、直接わたしのフィロソフィと関連させようという考えはありません。

では最後の3)です。

「対立を超えたところに宗教的な救済があると思うのです。」(内田)
と言われるときの心＝意識＝精神は、宗教的な境地でしょう。

わたしは、人間の現実(もちろん理念やロマンの世界などの非現実を含みますが)について話しています。人間は言葉により世界を分節化し、意味づけ、思考していますから、「対立」は意識するとしないと関わらず必然です。明暗、軽重、動静……という事象をから、善悪、美醜……という価値を表す言葉、男と女、こどもと大人、生徒と教師、すべて「対立」する言葉です。

対立がなければ世界はのっぺらぼうです。現実の人間関係でも、こどもの言い分と大人の言い分は食い違いますが、社長と社員の言い分も異なることが多いでしょうし、男と女の意見の相違は永遠(笑)でしょう。そういう対立があるから世界は動き、色づき、活気にあふれ、立体化するのです。対立を恐れたら、生気のない死んだ世界になってしまいます。否定は元も子もなくなりますから困りますが、

対立は何より大切です。

武田康弘

内田=>武田

武田先生

お答えありがとうございます。少し考えてまたメールします。武田哲学と宗教の差異性が分かりました。

以下の点を確認できました。

1) 竹内先生の超越性原理について承知しました。(解放の神学を高く評価していました)

→宗教の原理を人間の生の原理に適用するのは反対、有効ではない。

2) 先生の「私の善美への憧れを座標軸」に生きるというのは、生活世界の中に「善美」を見たり感じたりすること、子育てををする中で、あるいは、他者との会話の中で、あるいは、音楽を聴き、絵画や彫刻を見る中で、あるいは、本を読む中で、あるいは写真を撮る中で、あるいは散歩する中で、感じ知ることを基に思考して得られる視座でということである。哲学書を読んだり、宗教書を読んだりするのもその経験の一部分であり、特別な位置をしめるものでない。

3) 人間の生の現実において、「対立」は必然であり、必要なものである。対立があるから生活世界のダイナミズムがある。対立がなければ、生気のない死んだ世界となる。

以上の1)2)3)により、武田フィロソフィーと、宗教や宗教の論理との相違を確認できました。それは、人間の生の現実において、よく生きるための知について、またよく生きるための方法についてのことでした。もはや、生身の現実社会の中では、宗教的な超越性原理の有効性はなく、それとは異なる普遍性の探求こそ必要ということだと思います。私は、この提案は非常に重要なことと思います。現実の世界は、宗教紛争や民族紛争が基に、目を覆うばかりの悲惨や悲劇が繰り返されています。そこから脱出するヒントがあるかもしれません。

※私はブッダの「自帰依」の思想は、主観性・個人の尊重を基にしており、私見として、武田先生の主観性の知の思想に近いものを感じています。→私が引き

取って考えていきます。

内田卓志

8. プラトンのイデア論、 「ほんらいのフィロソフィは、書物の読解ではない。」

内田=>武田

武田先生
インタビューの続きです。

最近、プラトンを30年ぶりに再読しています。ちょっとですが。納富信留教授の『プラトン—理想国の現在』も読んでみました。さすが納富教授、素晴らしいプラトン論のひとつと拝読しました。

そこで、質問します。プラトンが、『ポリテイア』で主張している「イデア」についてです。この著は、日本では「国家」と訳されていますが、かつては「理想国」と訳されていたようです。

プラトンは、武田先生に最も影響を与えた人ですね。

そのプラトンの国家編でプラトンは、イデアについて主張します。イデアは、ある絶対的な超越性を言っていると思います。先生は、超越性原理を批判されますが、その文脈の中での「イデア」について教えてください。その意味とその役割について。イデアを絶対的な超越と考えると武田哲学とは、相いれないことになるとおもうのですが、如何でしょうか。

武田=>内田

内田さん、

そう、「理想国」なのです。プラトンは、「ポリテイア」の最後に、今まで書いてきたことは紙の上の話である、と明言しています。まさに、紙の上の「理想」であり、思考実験です。

また、「イデア」を絶対的超越と読むのは、キリスト教を常識とした16世紀に始まる近代の西ヨーロッパ人による読み方です。日本の学者もすべてそれにならっていますので、同じです。

イデア論は、唯名論として見れば、現代では言語論の常識であり、すんなり理解できるとするのが、わたしの考えで、そのような読みにより武田思想は成立しています。

プラトンのソクラテス対話編は、「絶対的真理を求めるもの」とは読めません。「絶対的真理」とは異なる「普遍性の探求」として捉えないと、古代ギリシャのフィロソフィとキリスト教——大きく異なる思想を同一のものとする愚を犯してしまいます。

そうならば、近代の西ヨーロッパのキリスト教化された哲学の見方で、ギリシャのフィロソフィを知ることになるわけです。

なお、わたしとソクラテスの行為(プラトンの著作)との関係についてですが、ソクラテスを知った後で、わたしのフィロソフィ(自分で自分の経験を基に考える営み)があるわけではありません。小学生以来の考える＝哲学する営みが先にあり、そのわたしの思考方法をサポートしてくれるものとしてソクラテスを見つけた、というのが事実です。プラトンの著作を読んで、今のわたしの思想があるのではなく、いまに役立つように使用してきたのです。

プラトンの後期はピタゴラスの神秘思想の影響で難しいものとなっていますが、それについての解釈は別の人に譲ります。わたしの興味の埒外ですので。

武田

内田⇒武田

武田先生

『わたしのフィロソフィ(自分で自分の経験を基に考える営み)があるわけではありません。小学生以来の考える＝哲学する営みが先にあり、そのわたしの思考方法をサポートしてくれるものとしてソクラテスを見つけた、というのが事実です。』

先生の発言は、私には誠に羨ましいかぎりです。私には、このような体験が無いので最初は信じられなかったのです。まず本を読んで勉強した後に気づいたり、考えたりして、世界の見かたが変わる。つまり視線が変わることはあります。その上で考えてみて、実行したりします。私は、この繰り返しです。

私が、先生のような思考の訓練をしてこなかったせいなのか。理由は、分かりません。その意味で羨ましいのです。「哲学する営みが先にあり」との発言を信じるしかないのです。理由を少し述べます。

私は、10年以上白樺教育館の仕事を見ていますが、さて学問の研究者に「このような仕事ができるかな」といつも思うのです。教育論のところで詳細を語って頂

きましたので、ここでは省略します。

ただ、一人で、40年こつこつと自らの思想に基づく教育活動により、生活を建てていることが凄い。このことは、特に強調しておきたい事実と思います。

私も優れた研究者の方々に接する機会がありました。研究者は文献を正確に読み緻密に解釈して、自らの考えを表現します。「初めに文献ありき」、ということでしょう。文献学的な知のあり方や使い方では、白樺教育館の維持は困難だとわかったのです。どちらが、優れているとかいっているのではなく、白樺の活動を行おうとすれば、そのような文献学的知の使い方は、むいていない、効力が少ないということです。「自分で自分の経験を基に考える」営みから導かれた、フィロソフィーに基づき子供に対峙し交わる。私は、その活動の成果を見ているので、信じて申し上げます。つまり、学問の世界と具体的な経験の生活世界とでは、知のあり方、知の使い方が、異なるということでしょうか。

武田先生の主張するフィロソフィーは、学問ではないので、非学問的な知恵に支えられているのですね。(内田卓志)

続けて、
次にプラトンのイデア論のこと。

先生のお立場は、「絶対的超越」と読むべきではない、イデア論は、唯名論として見れば理解できるとのことですね。そのような文脈の上に、武田先生の思想は成立していると理解しました。

プラトンのイデア論は、いまだに議論のあるところで学問的にどう理解すればよいのかは、分かりません。後期プラトン哲学は、先生もご存じの通りイデア論を否定しているとも解釈されます。この問題は、学者におまかせしましょう。

ただ、私もプラトンのソクラテス対話編は、「絶対的真理を求めるもの」と理解すべきではないと思います。自らの不知を最も自覚したソクラテスが、絶対的な真理を追い求めるのは、言語矛盾のようにも感じます。それよりソクラテスは、普遍性の地平を探求していたという先生のご解釈のほうが私には、「ピン」ときます。先生は、プラトンというイデアは、あくまでも「理想」(追い求めても離れていく存在、どこまでも到達できない場所)を語っているので、それを絶対的超越とか超越性原理と考えることはできない、というご主張だと分かりました。

フェイスブック上でも、先生へのインタビューから対話が始まっているようですね。私も楽しみです。

※イデア＝理想とは厳密には理解すべきでないとか、研究者の間では議論がありま

す。納富教授もそのような見解ですが、結論は武田先生のプラトン理解にも近いと感じます。その他プラトンのことで語りたいことは、つきません。戦前の南原繁の『国家と宗教』でのプラトン理解は、学者の良識の頂点のような勇氣ある著作でした。

内田卓志

9. つまらない顔はイヤ、からはじまったわたしの哲学。

武田⇒内田

内田さんの実存的な話しが入り、対話が前進しました。嬉しいです。まず、わたしが哲学へ向かった動機を記します。

なんで、皆、つまらない顔をしているんだろう？楽しそう、とか、嬉しそうではなく、曇った顔をしている。生き生きしている人は少ししかなくて、かたい顔、濁った顔が多くて、魅力のある人は少ないな。

小学生のわたしは、学校でも街でも電車の中でも、つまらない顔をしている人が多いのが疑問でしたし、嫌でした。



7さいー小学2年生のわたし
(撮影は、父)

それが人間の生き方を考える一つのキッカケとなりました。どのように生きるのがよいのか？何と、どう向き合って生きるのがよいのか？どんな態度で生きるのがよいのか？楽しく、イキイキと、よろこびの多い生き方、意味の濃い、深く納得できる生き方、それは何か？どう考えればよいのか？そう思い、悩み、考え、試して、対話して、という人生は、そのようにして始まったのです。幼いころから、父への質問は毎日のようでしたし、友人との話も、意味や価値を問う内容で、知らずに、フィロソフィの毎日だった、というわけです。

だから、書物もよく読みましたし、これは、と思う本は、書き込みをしながら熟読しました。中学2年生の時に小遣いではじめて買ったのがヤスパースの『哲学入門』でしたが、感動しつつも、賛成できないと思うところもありました。

書物は書物としてしっかり読み、わたしが思考する訓練や手助けとしましたが、哲学書が真善美の基準になることはなく、ある考えが、【私の赤裸々な精神＝頭と心身の全体で感じ知る現実】に如何に応答するか、それが基準なのでした。『聖書』などの宗教書は真面目に読むほどに、その独特の雰囲気＝超越的思想に嫌気がさし、わたしの宗教(一神教)嫌いを決定的にしました。イエスその人への評価とは別の話ですが。

また、それと同時に、真理とは何か？どのように考えるのが「正しい」のか？という純哲学的＝学的追求も執拗なまでに(笑)行いました。認識論の原理としての現象学です。

簡単ですが、これが、内田さんの最初の質問へのお応えです。

10. 「学問的」ということと「自分で考える」ということ。

次に、**フィロソフィの本質に関わる核心点**についてお応えします。

【学問的・文献学的】と**【非学問的知恵】**という区分けについて。

内田さんは、思想や哲学について、**【学問的・文献学的】**と**【非学問的知恵】**という区分けをされましたが、大事なことなので、確認します。

ソクラテスは、話しことばによる問答的思考で、本を書かず文字を残しませんでしたので、彼の知的営みは、文献学的・学問的とは言えません。

またインドの釈迦の解脱、自帰依－法帰依の思想も文献学とは無縁で学問的ではありませんでしたし、イエスの既存の世界の常識を覆して新たな世界を拓いた言辞行為も、少しも学問的ではありません。

近代の西洋哲学の始まりはデカルトですが、彼の有名な『方法序説』は、書物を捨てて体験に基づいて考えることを宣言した本で、まったく文献学的ではなく自説を述べた本ですので、少しも学問的ではありません。

また、『社会契約論』を書き近代民主政の原理を提示したルソーは、恋愛小説家として知られ、家庭教師もして生計を立てていた人で、社会思想の研究者ではありませんでした。『社会契約論』は、新しい社会原理のアイデアを打ち出した書で、文献学的ではなく、これもまた学問的著作ではありません。

それらはみな「文献学的・学問的」でないのですが、彼らの本を研究する今の学者の営みは、文献学的・学問的のです。そうすると、人間の生き方を考察し、新たな人間観や社会観を示した人や書物は、非学問的で、彼らの本や人となりを研究するのが学問的だと言うことになります。

思想や哲学においては、「文献学的・学問的」というのは、過去の人や書物の研究ですが、それが思想や哲学という営みの中心・本体なのでしょうか？思想や哲学の中心・本体は、過去・既存ではなく、未来に向かう精神から生まれる知的営みではないのでしょうか。飛翔するイマジネーションによる思考こそが思想や哲学の中心・本体ではないのでしょうか。

わたしが思うに、思想や哲学の中心となる営みは、学問的というのでなくて、ストレートに**【知的】**なのです。

ここで、ひとつ大事な知識を披露しますが、知的という「知」とは、「知恵」という意味に限定されません。知識と知恵を分けてしまうのは、分類好き(分類趣味)のアリストテレスによるもので、ソクラテスとその弟子のプラトンには、知識と知恵を分ける考えはありませんでした。知的とは、よくみなが言う「知識」と「知恵」の双方を合わせた概念なのです。わたしの言う「知」とは、そういう意味の「知」です。

思想や哲学の営みは、【知的】なのであり、学問的なのではありません。過去に囚われた文献学ではないのです。過去は手段とてあり、中心・本体は、未来への豊かなイメージに支えられた今なのです。

以上は、核心中の核心(原理中の原理)と思います。

武田康弘

11. フィロソフィの本質とは、誰にも何にも遠慮せずに堂々と思考する営み

内田⇒武田

「思想や哲学の中心・本体は、未来に向かう精神から生まれる知的営みで、飛翔するイマジネーションによる思考にある。その活動や働きは、ストレートに知的である。」

— 何だか、サルトルを思い出するような感じです。サルトルは、かっこよかったですね。

プラグマティストである武田先生は、そのような思考の実践活動として、白樺教育館を立ち上げ、運営してこられたのですね。「思考は行為の一段階である」ということでしょう。

そこで、ストレートに伺います。私たちは、毎日毎日、考えそして行為しています。

それが生活であり、人生があります。人によって濃淡はあるでしょう。ただ、私のような市民が、フィロソフィーに望むことは、如何に生活や仕事や人生にフィロソフィーをフィロソフィー的な思考を活用できるのかということです。飛翔するイマジネーションによる思考、というと私にはちょっと難しいように感じてしまいます。

また、先生がよくいわれる問題、「イメージやイマジネーションが先にあり言語が先にあるのではない」

人間の認識に関わる問題だと思いますので、簡単に説明いただけますか？

武田⇒内田

内田さん、問題が核心に迫りました。お応えします。

白紙に戻して見る、大元を探る、「〇〇とは何か」を知ろうとする、というのは、人間がみな持っている知的好奇心で、それがフィロソフィですから、解き方だけ知ればよい、とか、丸覚えでその場を乗り切ろうというのではなく、「考えてみよう」「意味をつかもう」とする頭の使い方は、フィロソフィです。

それは、内田さんの言われる通り誰でもしていることですが、フィロソフィとは、それを自覚してするだけのことです。それをしないでまるでオートメーションのような頭の使い方をする 것도多々ありますが、いったんストップをかけて元に戻して考える習慣をもつ人は、豊かな世界を生きることができて「得」をするし、それは「徳」につながっている、と思います。

今までの既成の見方や価値観に囚われることが減り、頭が自由に動き、言葉と行為に幅と深みと面白味がでるのですから、どころんでも生活に仕事に自ずと役立つのではないのでしょうか。わたしの人生はわたしにそう教えます。まさに「未来へと向かうイマジネーションによる思考」です。

しかし、ふつう、哲学と言えば、固い・重い・暗いというイメージをもたれることが多いです。なぜでしょうか。考えたり意味をつかもうというのが特別なことで、重苦しいイメージとなるとは不思議なことです。

それは、古代アテネでは、フィロソフィは、エロース=恋愛をキーワードにしていたのに(プラトンがつくった学園「アカデメイア」の主祭神はエロースでした)、それを後のキリスト教が「エロース」を邪なものと考え、人間は原罪を負っている存在とし、「アガペー」という神への愛が大切だとしたことに起因しています。キリスト教のローマは、フィロソフィを禁止し(「アカデメイア」は廃校)かわりにキリスト教神学によるスコラ哲学をつくりましたが、16世紀にはじまる近代哲学はスコラ哲学の改革ですので、キリスト教への信仰と理性的な人間精神の探求の無理な統一をはかることになったのです。

日本も明治になり、西ヨーロッパの近代哲学を直輸入にしたので、フィロソフィ=恋知は、固く重く難解なテツガク=哲学となっています。そこからの脱出が必要だというのが、わたしの考えであり主張です。

イマジネーションについてのお尋ねですが、それは、幼子を見ればよく分かります。言葉が使えない1歳の子は、感動的とか言い得ないスピードで日々、世界(自分を取り巻くもの)を認識します。その認識は、感覚とイメージに基づいています。それが先行していて、膨らんだイメージによる認識は、2才ころから言葉を観念の道具として用い出すことで明確になるのです。言葉を魔法のアイテムのように使います。

だから、わたしたち大人も、出来合いの言語がつくる意味とイメージに囚われずに、世界を言葉の介在なしに直接見る練習が必要です。いわば始源—白紙に

戻して世界を感じ知ろうとするのです。街中でも自然の中でも芸術作品を見たり聴いたり触れたりする中でも、言葉を介在させずに、そのまま見る・聴く・感じるのです。そういう練習がとても大切で、それを意識して行うことがフィロソフィの基盤となります。言葉で明確化された認識を、再び始源に戻してみるわけです。「飛翔するイマジネーション」とはそういうことで、特別な話ではありません。大人が幼児の思考を取り戻す作業を意識的にしてみる、というわけです。

最後に逆質問ですが、内田さんは、わたしをプラグマティストと規定しますが、そうなのですか？

哲学という科目に囚われないで、自らの具体的な経験に基づき、自由に本質的に思考する、世俗の権力や権威とは無縁に思考する、誰も何も特別視せずに堂々と思考する、というのがわたしのフィロソフィなので、それをわたしは「恋知」と名付けていますが、「プラグマティスト」という規定でよいのでしょうか。

武田康弘



2016年2月7日（日）ソクラテス教室40周年会で
内田卓志 武田康弘
撮影：古林 治

12. プラグマティスト／現象学 フィロソフィの方法と本質

内田⇒武田

武田先生

社会と政治の前に回答と現象学のことをちょっと質問をします。

ちょっと長くなりました。よろしくお願ひします。

...

以下回答と質問です。

まず、私へのご質問からお答えします。私が、プラグマティストといっている人は、先生が主張されているフィロソフィ、そのようなフィロソフィをする人、行う人のことを個人的に広義に解釈してそう呼んでいます。

ご存知のように、一般的には、哲学史でいうところの「プラグマティズム」の哲学者、パースやジェイムズやデューイらを代表的なプラグマティストといっています。

また、プラグマティズムという言葉が、ギリシャ語に由来しており、パースは、カントを学び、そこからつくった概念だとか本には書いてあります。

プラグマティズムでは、「思考は行為の一段階である」と考えます。思考だけでは不十分です。「行為する・活動する」ことが大切です。私は、「フィロソフィする」として、具体的な経験の場面で、思考の作用が何らかの行為や働きとなって表れてくることを強調したいと思います。

以上の意味で私にとって武田先生は、正に「プラグマティスト」です。武田先生は、皆さんが認めるように、ダイナミックな方ですよね。よって、私の中でのプラグマティストとは、ジェイムズやデューイを学んでいるとか、その学説を支持する人などの意味ではないのです。

そして、盛りだくさんのご回答を頂きありがとうございます。キリスト教やスコラ哲学までも触れて頂きました。

白紙に戻して見る、大元を探る。そうすれば今までの既成の見方や価値観に囚われることが減り、頭が自由に動き、言葉と行為に幅と深みと面白味がでる。生活に仕事に自ずと役立つ、それが先生のおっしゃるフィロソフィですね。

事物を白紙に戻して見る方法にも言及されました。それは、感覚とイメージによる認識といわれます。――「出来合いの言語がつくる意味とイメージに囚われずに、世界を言葉の介在なしに直接見る練習が必要です。いわば始源―白紙に戻して世界を感じ知ろうとするのです。街中でも自然の中でも芸術作品を見たり聴いたり触れたりする中でも、言葉を介在させずに、そのまま見る・聴く・感じるのです。そういう練習がとても大切で、それを意識して行うことがフィロソフィの基盤となります。」(武田)

以上のようなことは、大人の私にとっては難しいことです。先生がいわれるように、大人が幼児の思考を取り戻す作業を意識的にしてみること、練習してみることは、まことに必要なことと思います。

私は、美術館や博物館で芸術作品を見たとき、その作家の名前で作品の価値を判断していないか？ 私は、コンサートに行き音楽を聴いたとき、その演奏の良し悪しを演奏者の社会的評価で判断していないか？ 日常の生活で、無意識に色眼鏡をかけて人を見ながら、その場その場の出来事に対応していないか？ 新し

い仕事に携わりチャレンジが必要な時に、必要以上に過去の慣習に囚われていないか？

先生のいわれるように行為してみると、日常の生活に仕事に、具体的なレベルでどのように役立つのか、その実感は正直いって今はありません。直感的に、必要な行為だと分かります。意識して、練習してみましょう。ただ、この練習は毎日毎日絶え間なく行っていく行為です。大人の私は、言葉の世界にどっぷりと浸かって生きています。きっと練習の成果として、事象を白紙の気持ちで真正面から見る事が可能になるでしょう。その行為が、常に反射となって習慣化、日常化したとき世界が変わって見えるかもしれません。

私は、武田フィロソフィによって、生活の具体的経験の場における対象への見方や振る舞い方を学びます。**地味な行為**と思いますが、積み重ねて行くしかないでしょうね。このような方法論的な話は、大学の哲学の授業では聴けないし、哲学の本にも書いていません。

先日白樺教育館へ行きました。30年以上前から武田フィロソフィと共に歩んだ方々とお会いしました。なぜそんなにも長い間、フィロソフィを介して交際ができるのだろうと素朴に思います。そこに武田フィロソフィの秘密があるのでしょうか。

伺ったことに関連してちょっと伺います。私は、このような認識方法をもちいるとき、現象学の難解な論理を具体的な経験や現実の生活の場に、活かしくことに繋がると思いました。私は、現象学についてほとんど分からないのですが、そう直感しました。武田先生は、現象学との関係でどのように考えておいででしょうか。

内田卓志

武田⇒内田

内田さん

はじめに、現象学へのご質問にお応えします。

青白く見える、ギーギーという音が聞こえる、ベタベタしている、というような、直接的に与えられる感覚所与を「内在」と呼びます。

それは、わたしにとって動かしがたい感覚ですので、それを疑うことはできません。内在として与えられたものは、認識の究極の基盤です。

青白く見えたものを、別の場所で見たら紫色に見えた、ということはありませんが、その時にそのように見えたという感覚＝内在的知覚は絶対です。

その内在としての知覚こそあるゆる人間認識の最後の

拠り所であることの自覚、それが現象学の核心であり、認識論の原理中の原理です。

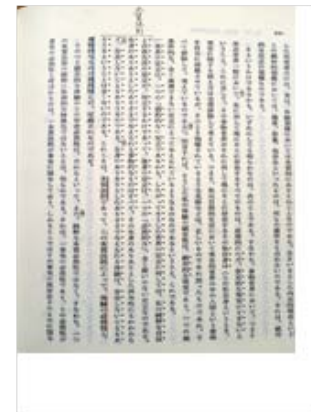
具体的な事物、例えば、机とかカバンという認識は、それがもしかすると机やカバンとしてつくられたものでない可能性が残りますので、「疑える」のですが、内在として与えられた感覚与件は「疑うことに意味がない」=疑えないのです。

これがフッサール著「イデーン」I - 1 (みすず書房刊) の第2章46「内在的知覚には疑わしさがなく、超越的知覚には疑わしさがあること」の意味です(超越的知覚とは、机やカバンという認識のこと)。



この簡明な認識論の原理(「内在」)を明晰にすること=深く自覚することが、フィロソフィの最大の眼目だとわたしは考えてきました(20数年前の小論文に記載)。

なぜなら、幼いころから記号(数字や言語)の操作を優先する学習を強いられると(現代の「優秀者」にはそのような人が多い)、内在としての知覚が希薄になり(そのことを本人は自覚しない)、認識は、人間の健全性や有用性から離れてしまいます。数字や言語が先立つ紋切型となるからです。しかも「記号ないし言語至上主義」という歪みを自覚できずに、それが却って己の優秀さの証だとさえ信じ込みます(いわゆる「東大病」)。



これは心身全体での会得=五感をフルに用いての健全な認識と対極です。観念主義=様式主義=型ハマリ=デジタル的な白と黒という認識を「正しい」「優れている」と思い込むのですから、とても困った「現代の病」といえます。

まず、なぜフッサールの認識の原理論(現象学)を自覚することが大切なのかにお応えしました。フィロソフィの原理(=土台)である認識論を明晰化するのにはフィロソフィ(人間が物事を元から考えること)の前提です。次に、ご回答とご質問の全体についてまとめてお応えします。

もともとフィロソフィとは、持ち運べるような「真理」の体系ではなく、元に戻して(幼児の目で)世界を見直すという実践をさします。生活世界の中で有用に考える実践をするという意味では、【プラグマティズム】と言えるでしょうし、また、

どこまでも「私」の内在から世界を見、知るので、【超越論主義】(フッサール現象学)とも言えますし、「私」の意識を原理とするので【実存主義】とも言えますし、無意識領域までも意識化しようとするので【構造主義】とも言えます。

また、「私」の想像力に基づく思考を基底に置くので、必ず「個人」という概念を必要としますので【個人主義】でもありますが、それを可能にするには民主的社会(互いを対等な存在と見なし自由を相互に尊重し合う社会)を要請しますから、【民主主義】者でなくてはなりません。

いま、強調するためにあえて、〇〇主義、とか〇〇主義者と書きましたが、ほんとうは、フィロソフィと、「主義」や「宗教」は相いれませんが、「主義」ではなく「論」と言うのがよいのです。特定の見方や立場に囚われずに、柔軟で自由な見方がフィロソフィの本質ですから、特定の政治思想、例えば、明治政府がつくった靖国主義を前提にする思想とは次元を異にしますし、靖国主義のようなアナクロニズムでなく、進歩的と思われる思想にしても、それを「主義」として固定してしまえばフィロソフィとは言えません。フィロソフィは政治運動でも宗教運動でもなく、「私」が自他の人間性を肯定して内からの喜びや輝きをもって生きるために必要な最も人間的な営みだ、とわたしは思いますので、わたしは自覚的なフィロソファーであり、同じことですが、恋知者です。

というわけですから、フィロソフィとは、ある意味では確かに内田さんの言われる通り、「地味な」行為＝活動でしょう。しかし、その地味な営みは、「すべての有を支える無」とも言えますし、根源的な問い＝フィロソフィなくしては、どのような人間の活動も意味を持たない＝意味付かないのですから、すべてを支える大地であり、すべてを包む海であり、すべてを輝かす太陽でもある、と思います。人間が人間として生きる(特定の職業人としてではなく、特定の宗教者としてではなく、特定の主義者としてでもなく)ためには、何よりも必要な営みではないでしょうか。

「日本にフィロソフィなし」と言われますが、それは、残念で、危険で、愚かで、不幸なことです。

武田康弘 2016年3月8日

2016年7月3日